

02

2012年5月12日

編集：荒浜再生を願う会
「希望の黄色い
ハンカチ大作戦」事務局
発行：NPO まちの縁側育くみ隊
(問合せ：事務局 052-201-9878)

通信

荒浜

COMMUNITY PAPER

希望の黄色いハンカチ大作戦 荒浜と世界各地のひとびと交流の軌跡

PICK UP

今週一枚



「昔々の故郷の情景 今は
亡き父母兄弟 近隣の人々
を心の中で総動員して
1枚1枚書きました
子供らの成長を願う 地域
の連帯 穏やかで 大らかな
人々の絆が自分を包み育
んでくれて居た事
改めて実感した次第です
黄色いハンカチに思いを込
めて」(愛知県春日井市 稔さん)



目次

■ 「希望の黄色い大作戦」のとりくみ経過

■ 荒浜再生を願う会

「ふるさと座談会」パート1

たった一本の黄色の旗。

仙台荒浜（深沼）で親しまれている浄土寺の

五色旗のうちの黄色だけがみつかったとき、

ふるさと再生への希望の象徴だと

住民たちはつぶやいた。

荒浜は、希望を黄色いハンカチに託します。

みなさん応援してください

荒浜再生を願う会

「希望の黄色いハンカチ 大作戦」のとりくみ経過

ブログで紹介している活動の様子を抜粋
してお届けします。

【荒浜より】震災から一年を迎えて、

志援の仲間たちと

3月10日〜14日の間、志援の仲間たちが荒浜にて一堂に会しました。一年を迎えて、今回このような機会を設けた目的は3つあります。

1) 全国・世界中から集まっている荒浜応援の動きを地元荒浜に紹介する。

2) 希望の黄色いハンカチをみんなで設置して再生の気分を分かち合おう。荒浜、東北の抱えている問題は、日本全国の「ふるさと再生とは」という問題です。

3) 荒浜の過去のやすらぎとしあわせな暮らし・営みの思い出を語り合うグループヒヤリング。この調査は住民の手による再生のあり方提案を目指していくためです。

名古屋からは名〇まちの緑側育くみ隊の延藤・名畑、神戸から宮西悠司、川崎から矢野淳一。そして台湾からは黄智慧先生。黄先生は何のご縁かなんと苗字が希望の黄色いハンカチの「黄」ということで、天使が舞い降りた！とみんなで騒いでいました。先生のごことは通信〇1でも【台湾より】志援の輪〜仙台

荒浜応援団の台湾チーム結成フォーラム 編

〜で紹介していますように、台湾での災害復興の経験からの学びを伝えに来てくれました。台湾での2009年八八水災は、02の1年半前に起っており、行政の対応も共通する点が多く、住民の間に今後何が起って行くのか、という視点で見ると、台湾の経験は同時代の問題をかかえた先輩と言えらるでしょう。共通して、行政は当該地域の再建の方針を一色塗りにしてしまう、移転か現地再建かどちらかというやり方は、後に住民同士の対立へと転化して本場の問題を見えなくしてしまいます。決めるのは誰なのか。そんな問題を抱えながら、希望の黄色いハンカチをみんなで設置する時、黄先生から地元住民秀子さんにこんな励まし。「1年半先輩の台湾では、住民間の対立が色濃かったが、今はこんな状況です。現地再生を願って活動してきた人に対して、移転する人も、『私たちのふるさとを守ってくれてありがとう』と言うようになっていきますよ。」

■左が黄先生、右が秀子さん



■みんなで
ポーズ



■台湾の好
茶村より、魯
凱族の方が
らいただいた
た応援



荒浜再生を願う会

「ふるさと座談会」

パート1 (連載です)

荒浜の過去のやすらぎとしあわせな暮らし・営みの思い出をつぶやいき、現在の不安定さ・抑圧をはねつけ、乗りこえていくための未来を探します。

【佐藤秀子編】荒浜の暮らし

「いこ」荒浜で、家族一緒に。

私は5人家族なんです。父と母、妹、私たちの子ども。娘も18歳になりましたが、どういうわけか、(仮設のあるまちは)便利だから、駅前の方さでも行くのかなーっておもったら、「お母さん、やっぱり荒浜がいいよね。荒浜でないのだめだよねー。」って娘が言ってくれます。私は少し怖いからなー、って思ってたんですけど。78になる父は、本当は今からの予定では自分の食べる分くらいの漁をして、私たちが生計を立てていこうって、いう矢先で、こういう地震が起きたんです。父は地震以来、一日も休まず、顔を真っ黒にしながら、漁業っていう、赤貝をとるっていうのに専念して、その姿を見てたら、私たち子

どもと孫でどうしてもじっとしてられなくて。父の姿を見て、私も親を助けなきゃいけない、ここで一緒に頑張ろうっていう気持ちが出てきたんです。

歌歌っても誰にもなんにも言われな

いーやすらぎの場なんです。テトラポットが見てくれて、綺麗な松林からは、毎日元旦のような日ノ出。

町中に来て、仮設の狭い部屋で、自分の安らぐところとしての荒浜を想います。何かあってもすぐぼいっと出れば、テトラポットみてくれて、金華山は拝めるし、お日様は出てくるし、歌歌っても誰にも言われな。松林さ入れば、すごい自然。海風にあたってみたり、夏の暑い日は夕涼みに海さ行くところ。ラーなんかいらなくらい寒いです。朝は朝でね、朝5時半くらいに起きて、松林からお日様が出てくると毎日元旦のように拝んで「今日も一日よろしくお願いします」、ってそれが当たり前だったんです。当たり前前の生活に気付かなかったんですね。「おはようございます。こんにちは」って声かけるのが当たり前なんです。そういうので、習慣で育ってきたもんだから。ちょっと行けばね、5分もしない内に松林さ入ると、あみっこ(キノコ)採り。金茸、松露(きのこ)とり。マツタケ採る人は絶対に場所教えないんですけど

ど。私小さい時、学校はストーブ。マツパさらい、松かさ拾いとかもしました。いつでも松林の中ゴミひとつなくて、松拾いするからすごくきれいだったんです。

生活の糧がやっぱり漁業ですから、海のそばで。海が見てくれる。

海の近くで「今日風吹いてるなー」イナサだなとか。今日だめだなーとか、わざわざ新港(仙台新港)まで行かなくてもわかるんです。波の音も、おじいちゃんが漁頑張ってる声も聞こえるんです。そういうの見て育ってきたんです。津波も怖いから迷うんです。でも、一人で泣いても、やっぱり海が見てくれるんですよ。あのキラキラとした海の光るのが何とも言えないんです。七郷中学校私から来ると海の潮風の匂いがプーンとしてくるんです。そういう意味で、田園地帯の青々とした風景も出てくるし、海のプーンとした匂いが入ってくるし、あー荒浜だーって。

【秀子さんの話をうけて座談】 「もぞこい」まち、荒浜。

親の働く背中を見て、子ども頃から手伝いをしてきた秀子さん。その気持ちの中心に「もぞこい」の感情。「愛らしい」と「かわいそう」の間のような繊細な仙台弁の表現。みんなからは、まちそのものが「もぞこい」だよ、の声。(次号に続く)